トゥキュディデスの演説の文体について

柳　沼　重　剛

トゥキュディデスの文体についてなら、古代ではハリカルナッソスのディオニュシオス、そして近代では前世紀末から今世紀初にかけて F. Blass と E. Norden らによってすでに論じ尽くされていて(1)、何を今更という感じがしないでもないが、私にとっては、本誌前号に書いたように、トゥキュディデスの『歴史』の叙述部分と演説の部分とを比較した時、-sis 名詞の用法ではその両者にさしたる相違も認められないのに、不定法の用法に関しては極端と言っても差支えない違いがある、というのは大きな驚きだった。そこで、不定法の用法の他にも、叙述と演説との間では明らかに相違がある、というものがまだ何かあるのではないか、そういう相違のあるものを幾つか集めたら何かが言えるのではないか、という期待が生じて来て本稿を書く気を起した。それに、ディオニュシオスを知らなくても、Blass や Norden に教えられなくても、トゥキュディデスを読んだ人なら必ず、叙述の文と演説の文では文体に違いがある、演説の方はいやになるほどむずかしい、ということを肌で感じているはずである。トゥキュディデスの文章は感動的だが、しばしば感動よりは難解さで唸らされることがある、というのが平均的読者の感想だろう。

そこで、前回不定法について調べたのは、ほんの事のついでにだったのだが、今回はついでででなく、不定法に引続き学校文法の立場から調査を継続してみようと思う。使用テクストは Romilly-Bodin-Weil による Budé 版 (Paris 1953–72) とする。この版が最も新しいということの他に、Hude (Teubner), Classen-Steup (Weidmann), Jones (OCT) という代表的な刊本を比べる時、最も特殊な読み方が多いのが Jones 版で、続いて Classen-Steup 版、そして Hude 版と Romilly 版には意外に共通する点が多い、という理由による。そこで Romilly 版を底本とし、Classen-Steup による詳細な註を参照しながら読む。Gomme-Andrewes-Dover の註 (Oxford 1945–81) は勿論見る。

1

難解な文と言えば誰しもまず思いつくのは文が長いということだろう。長い文よりは短い文の方が読みやすいに決っている（勿論散文に限っての話である）。近頃の大方の文章作法の本には、なるべく短い（あるいは簡潔な）文を書くようにと薦めてある[2]。そこでトゥキュディデスの文の長さは、ということになるのだが、これはちょっと考えるよりは面倒である。第一、句読点の種類や位置が版によって（ということは、かなりの程度写本によってすでに）異っている、ということがある（この点でも Jones の OCT 版は特異である）。その上、句読点などというものは遙か後世の発明で、トゥキュディデスの与り知らぬ所だということになれば、絶対的な判断の基準はないということになってしまうが、それでも、どの版にも共通する句読点の方が圧倒的に多いということに支えられて、Budé 版のそれに盲目的に従いながら読むことにする。さらに、終止符ばかりでなくセミコロンで終っている場合も、これで一個の文が完結したと見ることにするが、これはその方が自然だと私には思えるからそうするのだが、ここにも問題はある。セミコロンで終る文章に後続する文が不定法句を含んでいて、その不定法を受ける述語動詞は先行する文（つまりセミコロンで終る文）の方にあって後続の文にはない、という場合がそれで、これを独立した一個の文と見なすことには無理があるが、それでもセミコロンで区切られている限りは別の文と見なすことを押通す[3]。

このように条件を一定させておいて、さてトゥキュディデスの文の長さを計ってみる。全部という訳には行かないから第一巻のみに止める。平均して1個の文は何語から成るかを見る。すると、叙述部分は1文平均24語、演説部分は1文平均23語から成っていると知れる。

これは意外な結果で、というのは、演説の方が叙述部分よりかなりむずかしいので、演説の方に長文が多いに違いないと予想されたり期待されたりするからなのだが、上の数値から見る限り、両者の文の平均的長さには殆ど差がないのみならず、僅かながら叙述部分の方が長くさえある。ということは、文の長さは、トゥキュディデスの『歴史』の演説の文章について我々が感じている難解さの原因ではあり得ない、ということである。——参考までに他の散文作家の文の長さを調べてみると大略次のようになっている、

ヘロドトス『歴史』第一巻　　18語

クセノポン『アナバシス』第一巻　15語
リュシアス『エラトステネス』　20語
　同　『葬送演説』　29語[4]
イソクラテス『パネギュリコス』　30語
デモステネス『王冠』　20語
　同　『第一ピリッピカ』　25語

こうして見ると、一般にやさしいと言われている文章はやはり文が短い傾向がある（顕著な例外はデモステネスの『王冠』[5]）ことが分って、それならなおのこと、トゥキュディデスではそれがそうなっていないのは驚いてもよいことになる。

そこで、トゥキュディデスの文章もをもっとよく見るために、彼の『歴史』からなるべく方々の、内容から見てもなるべく変化のありそうな箇所を選び出し、以下本稿を通じてそれを資料とすることにする。①第一巻から、スパルタでのコリントスの使節の演説（68-71節）、②そこに居合せたアテナイ人の演説（73-78）、③スパルタ王アルキダモスの演説（80-85）、④第二巻からペリクレスの戦死者葬送演説（35-46）、⑤ペリクレス最後の演説（60-64）、⑥第五巻の有名な「メロス談判」からアテナイ側の弁論、⑦同じくメロス側の弁論（合せて85-113）、⑧第六巻からニキアスのシシリー遠征反対演説（9-14）、⑨アルキビアデスの反論（16-18）、⑩ニキアスの再反論（20-23）、⑪アテナイ軍の船出を聞いたシシリーでの反応から、ヘルモクラテスの演説（33-34）、⑫同じくアテナゴラスの演説（36-40）、以上が演説部分からの選択で、計458文11432語、平均25語である。

次に、ほぼこれに見合う量でやはり内容が変化に富んだ叙述部分の箇所として、⑬第一巻1-23の序説、⑭第二巻47-54の疫病流行の記録、⑮第四巻26-41のスパクテリア攻防戦記、⑯同102-108のアムピポリスの顚末、⑰第七巻75-87のシシリー島でのアテナイ軍の退却と全面降伏、以上で446文10862語、平均24.4語である。

一覧表にすると次の頁のようになる。

表中太文字で記したのは、演説、叙述それぞれの部分における最大と最小の数値を示すものである。こうして見ると演説ではニキアスのアルキビアデスに対する再反論が最も長文が多く（僅少の差でペリクレスの葬送演説にも長文が多く）、アルキダモスがその反対、そして両者の間では1文平均約11語の差があること、また叙述部分での最大は、トゥキュディデス自身がその責任を問わ

表 1

	文数	語数	平均
① Ⅰ 68-71 コリントス人	46	938	20.4
② 73-8 アテナイ人	40	1090	27.3
③ 80-5 アルキダモス	43	848	**19.7**
④ Ⅱ 35-46 葬送演説	79	1930	29.1
⑤ 60-4 ペリクレス	39	1066	27.3
⑥ Ⅴ 85-113 メロス談判アテナイ人	42	982	23.4
⑦ 〃 同メロス人	26	606	23.3
⑧ Ⅵ 9-14 ニキアスⅠ	33	944	28.6
⑨ 16-8 アルキビアデス	35	962	27.5
⑩ 20-3 ニキアスⅡ	17	519	**30.5**
⑪ 33-5 ヘルモクラテス	27	776	28.7
⑫ 36-40 アテナゴラス	31	771	24.9
以上計	458	11432	25.0
⑬ Ⅰ 1-23 序説	137	3528	25.8
⑭ Ⅱ 47-54 疫病	57	1225	**21.5**
⑮ Ⅳ 26-41 スパクテリア	104	2575	24.8
⑯ 102-8 アムピポリス	39	1141	**29.3**
⑰ Ⅶ 75-87 アテナイ軍降伏	109	2393	22.0
以上計	446	10862	24.4

れて20年間の追放の刑に処せられることになったアムピポリスをめぐる攻防戦を叙した部分であり、最小は疫病流行の詳細な記録であって、この間にも約10語の差があることが分る。このうち特に、アムピポリスの文は長く疫病の文は短かめだということは何かを語っているように思えるが、そういうことは、他との関連であとで言った方がよいと思う。とにかくトゥキュディデスの場合、文の長さが難解だという一般的印象の要因になっているとは思えない。今はそれだけで十分である。

2

次に文の構成を見る。具体的には、いわゆるペリオドスをなしている文の実体である。ただしこのペリオドスの概念は、古代の文法学者たちにとっては分り切ったものの一つであったらしく、期待するほど明晰な説明はされていな

い。アリストテレスを見てもクィンティリアヌスを見てもそうである[6]。恐らく一番丁寧な説明は、Charles Darwin Adams が学生のために書いた註釈書 *Lysias: Selected Speeches* (New York 1905; repr. pap. ed. Norman, Oklahoma 1970) の Appendix III, B のもので、これはデメトリオスの文体論[7]の説明を土台にしたものである。

普通ペリオドスは「完結文」などと訳されているが、大抵の文は完結した意味を持っているから、それなら大概の文はペリオドスなのだろうと思えたりする。しかしペリオドスにとって大事なのは、文の初めの節を聞くなり読むなりすると、次にもう一つ節が続くはずだということが分ること、そしてその後続の節に至ると、これで文は終りだということが感じられること、である。だからペリオドスというのは、例えば *μὲν…δέ* や *οὔτε…οὔτε* などによって呼応関係を持ち、しかも互にバランスを保ち合っている句節から成る（これを仮に第一種ペリオドスと名づけ、以下では PI と記すことにする）か、あるいは、1ないし2個の従属節が先に来て後に主節が続き、そしてその主節の終結と共に意味がぴたりとこっちの胸に納まる、いわゆる sensus suspensio になっている（これを第二種ペリオドスと名づけ、PII と記す）かである。アリストテレスの『弁論術』3.9.5 は「単一の colon（殆ど節と同義と考えて差支えない）からなるペリオドス」などということを言っていて、折角落着きかけたのがまた混乱することになるが、今はそれを問わないことにする[8]。

しかしペリオドスについてはもう一つ言っておかなければならないことがあって、それは――今しがた註 (8) で紹介したヘロドトスの文章だが、これを終止符のある所まで全部、ただし一見して構文が分るように diagram として示すと次のようになる。

Ἡροδότου Ἁλικαρνασσέος ἱστορίης ἀπόδειξις ἥδε,
ὡς { μήτε τὰ γενόμενα ἐξ ἀνθρώπων τῷ χρόνῳ ἐξίτηλα γένηται,
μήτε { ἔργα μεγάλα τε καὶ θαυμαστά, | ἀκλέα γένηται,
τὰ μὲν Ἕλλησι, τὰ δὲ βαρβάροισι ἀποδεχθέντα,
τά τε ἄλλα καὶ δι' ἣν αἰτίην ἐπολέμησεν ἀλλήλοις. 5

この1行目は註 (7) のディオニュシオスによれば単一コロンのペリオドスで、我々の分類によれば PII、2行目以下は目的を示す従属節となってこの1行目にかかっているのだが、その従属節は *μήτε…μήτε* から成っているからこれは PI、さらに2番目の *μήτε*-colon の中の *ἔργα μεγάλα καὶ θαυμαστά* には4行目の形容詞節が伴っていてこれが *τὰ μὲν…τὰ δέ…* で PI、そこへも

う一つ τά τε ἄλλα･･･が上の ἔργα と対応してこれも PI、というわけで、一つの文章は必ずしも一つのペリオドスから成っているわけではなく、このように複合された場合も多く、文が長ければ長いほどそうなりやすい。あるいは、文全体は少しもペリオドスにはなっていないが、一部分だけはペリオドスだという場合もある。そこで以下にトゥキュディデスの文を調べるに当っても、そういう例にしばしば出遭うことになるが、そういう場合、たとえ部分的にしかペリオドスを含んでいなくてもペリオドス風文章と見なし、複合ペリオドスの場合は、その中で最も優勢なものに代表させる。これらの措置は乱暴あるいは恣意的だと言われれば、その通りと認めない訳には行かないが、とにかくこれでやってみると「表2」のようになる。nonP とはペリオドスでもなければペリオドスを含んでもいない文章のこと。先程同様太文字は顕著な数であることを意味している。

表 2

		文の数	PI		PII		non P	
			文	%	文	%	文	%
①	I 68-71 コリントス人	46	19	**41.3**	8	17.4	19	41.3
②	73-8 アテナイ人	40	8	20.0	16	40.4	16	40.0
③	80-5 アルキダモス	43	5	**11.6**	16	37.2	22	51.2
④	II 35-46 葬送演説	79	12	15.2	33	**41.8**	34	43.0
⑤	60-4 ペリクレス	39	13	33.3	9	23.1	17	43.6
⑥	V 85-113 メロス談判アテナイ人	42	15	35.7	9	21.4	18	42.9
⑦	〃 同メロス人	26	5	19.2		34.6	12	46.2
⑧	VI 9-14 ニキアス I	33	4	12.1	13	39.4	16	48.5
⑨	16-8 アルキビアデス	35	12	34.3	10	28.6	13	**37.1**
⑩	20-3 ニキアス II	17	4	23.5	2	**11.8**	11	**64.7**
⑪	33-5 ヘルモクラテス	27	6	22.2	8	29.6	13	48.2
⑫	36-40 アテナゴラス	13	8	25.8	10	32.3	13	41.9
以上計		458	111	**24.2**	143	31.2	204	**44.6**
⑬	I 1-23 序説	137	14	**10.2**	53	**38.7**	70	51.1
⑭	II 47-54 疫病	57	6	**10.5**	11	**19.3**	40	**70.2**
⑮	IV 26-41 スパクテリア	104	24	**23.1**	24	23.1	56	53.8
⑯	102-8 アムピポリス	39	7	17.9	15	**38.5**	17	**43.6**
⑰	VII 75-87 アテナイ軍降伏	109	13	11.9	28	25.7	68	62.4
以上計		446	64	**14.3**	131	29.4	251	**56.3**

全体として叙述部分は演説に比べてペリオドスが約12%少くて、なるほどと思わせるが、これは主としてPIが演説部分に比べて少ないことによっていることも分る。言い換えれば、PIIに関しては演説も叙述部分さしたる相違はなく、もしトゥキュディデスが演説は叙述の文章とは違う文章にならねばならぬと意識していたとすれば、それは叙述部分よりPIの多用、つまり対句や重ね句の多用という形で表れたことになり、これはとりも直さずゴルギアス以来のギリシア弁論術の重要な技法であったことが思い出せよう、と——、これだけで事が済めば大変楽しいのだが、上の表は、例えば同じ演説でも、①、すなわちスパルタの奮起を促すコリントス使節の演説はPIが41.3%もあるのに、それを受けたスパルタアルキダモスの演説③にはそれが11.6%しかなくて、その差殆ど30%、これは叙述部全体と演説全体の差を遙かに凌駕する値で、一体どう考えればよいのか、というような厄介な問題も提供している。私としては、コリントス人の方はスパルタの重い腰を何とか上げさせようと懸命で、だから何とか相手を説得しようとあらゆる努力を傾けた、その結果がこれであるのに対し、スパルタ人の方は、そのコリントス人に言わせるとお人好しでのろまでためらってばかりいる由だから、その演説もとても立板に水とは行くまい、と言えば説明がつきそうに思うが、それならPIIの方が37.2%もあって、これは全体の中でも多い方であるのはどう説明するのかと迫られると窮する。

しかしいずれにしても、ということはPIにせよPIIにせよ、ペリオドスというのは無雑作な言い廻しの正に反対で、それだけ技巧的であると同時にそれだけ整合された文章だ、ということは確かだろう。となればそれは、むしろ分りやすさにこそ通ずるはずだろう。アリストテレスに言わせるとペリオドスで書かれた文章は、「気持よく覚えやすい」(『弁論術』3.9.3)。とすれば、ペリオドスを約12%多く含んでいる演説は、叙述部分より約12%「気持よく覚えやすい」はずである。然るに大方の読者の印象では、演説は叙述より「気持悪く覚えにくい」とは言わないがとにかく辟易する。従ってペリオドスである文章が多いということは、文章が難解だということとは無関係だと知るべきである。

3

以上の如く、長いからと言って文章は必ずしもむずかしくはならず、ペリオ

ドスに凝った文章はむしろ読みやすいはずだ、とは言え長さによりけりで、トゥキュディデスにしばしば見られる1文100語にも達する文などというのはやはり長すぎるという感じがするし、それにこの種の文章というのは殆ど複合ペリオドス、あるいは部分的ペリオドスになっているから余計始末が悪いと思える。そしてトゥキュディデス難解の原因の一つはやはりここにありそうだとも思えて来る。例えば第六巻18.6のアルキビアデスの演説の一節などはどうだろう。全文は107語から成る。

καὶ μὴ ὑμᾶς ἡ Νικίου τῶν λόγων ἀπραγμοσύνη καὶ διάστασις τοῖς νέοις ἐς τοὺς πρεσβυτέρους ἀποτρέψῃ, τῷ δὲ εἰωθότι κόσμῳ, ὥσπερ καὶ οἱ πατέρες ἡμῶν ἅμα νέοι γεραιοτέροις βουλεύοντες ἐς τάδε ἦραν αὐτά, καὶ νῦν τῷ αὐτῷ τρόπῳ πειρᾶσθε προαγαγεῖν τὴν πόλιν, καὶ νομίσατε νεότητα μὲν καὶ γῆρας ἄνευ ἀλλήλων μηδὲν δύνασθαι, ὁμοῦ δὲ τό τε φαῦλον καὶ τὸ μέσον καὶ τὸ πάνυ ἀκριβὲς ἂν ξυγκραθὲν μάλιστ' ἂν ἰσχύειν, καὶ τὴν πόλιν, ἂν μὲν ἡσυχάζῃ τρίψεσθαί τε αὐτὴν περὶ αὐτὴν ὥσπερ καὶ ἄλλο τι, καὶ πάντων τὴν ἐπιστήμην ἐγγηράσεσθαι, ἀγωνιζομένην δὲ αἰεὶ προλήψεσθαί τε τὴν ἐμπειρίαν καὶ τὸ ἀμύνεσθαι οὐ λόγῳ ἀλλ' ἔργῳ μᾶλλον ξύνηθες ἕξειν.

一見して構文が分るように diagram として示すと次のようになるだろう。

καὶ μὴ ὑμᾶς ἡ | *ἀποτρέψῃ*

Νικίου τῶν λόγων ἀπραγμοσύνη
καὶ διάστασις τοῖς νέοις ἐς τοὺς πρεσβυτέρους

τῷ δὲ εἰωθότι κόσμῳ, | *πειρᾶσθε προαγαγεῖν τὴν πόλιν,*

ὥσπερ { *καὶ οἱ πατέρες ἡμῶν* | *ἐς τάδε ἦραν αὐτά,* 5
ἅμα νέοι γεραιοτέροις βουλεύοντες
καὶ νῦν τῷ αὐτῷ τρόπῳ

καὶ νομίσατε νεότητα μὲν καὶ γῆρας ἄνευ ἀλλήλων μηδὲν δύνασθαι,
ὁμοῦ δὲ τό τε φαῦλον καὶ τὸ μέσον καὶ τὸ πάνυ ἀκριβὲς
ἂν ξυγκραθὲν μάλιστ' ἂν ἰσχύειν 10
καὶ τὴν πόλιν | *τρίψεσθαί τε αὐτὴν περὶ αὐτὴν ὥσπερ*
καὶ ἄλλο τι,
ἂν μὲν ἡσυχάζῃ

καὶ πάντων τὴν ἐπιστήμην ἐγγηράσεσθαι,
ἀγωνιζομένην δέ
αἰεὶ προσλήψεσθαί τε τὴν ἐμπειρίαν 15
καὶ τὸ ἀμύνεσθαι | ξύνηθες ἕξειν.
| οὐ λόγῳ ἀλλ' ἔργῳ μᾶλλον |

簡単な註をつけておくと、上の diagram の3行目 τοῖς νέοις は普通なら属格にする所。どうして与格——特にどうしてトゥキュディデスが与格にしたのかは、詮索のしようもない。13行目では、τὴν ἐπιστήμην は明らかに後続の不定法 ἐγγηράσεσθαι の意味上の主語であり、その限りでは τὴν πόλιν と対等の地位にあることになるが、しかし14行目以下はまた明らかに πόλις のことを言っているので、意味の上では ἐπιστήμη とは πόλις の ἐπιστήμη のことだと解すれば辻褄は合うが、構文ということから言えば、この1行は括孤にでもくるんでしまった方がすっきりする(9)。

さて、全体は、1-3行目、4-7行目、および8行目以下末尾までから成る三つの命令文の並列だということは、上の diagram からすぐ分るだろう。第一の命令文は μή+接続法によるもの、主語たる ἀπραγμοσύνη と διάστασις が冠詞 ἡ を共有している。この語順から言って一種の sensus suspensio と見ることが出来、PII と認めてよいだろう。第二の命令文は、主部は4行目1行で至って単純だが、そこへ挿入句が入り、その挿入句にまた挿入句が入るという形をとっている。この形ならば通常は sensus suspensio が生じる所だが、4行目の命令文主部の主要素は、この行の後半、文全体から言えば文末に集中しているので、suspensio は起らない。従ってこの命令文は nonP. 第三の命令文は、命令法の動詞 νομίσατε が三つの Acc.+Inf. を従えているもの。ただし3番目の Acc. τὴν πόλιν はまた3個の Inf. を伴っていて、それぞれ11行目、15行目、16行目にそれがある(上の diagram ではこれらの Acc. と Inf. のすべてに下線をつけた)。所がこの Acc.+Inf. の間に別の Acc.+Inf. がさっきも言ったように入り込み、さらに τὴν πόλιν τρίψεσθαι という Acc.+Inf. には ἂν μὲν ἡσυχάζῃ という条件節が、(τὴν πόλιν) αἰεὶ προσλήψεσθαι という Acc.+Inf. にはやはり条件を示すが ἀγωνιζομένην という分詞がつき、この間に μὲν…δὲ…の対応関係もある(しかし μέν の方は ἂν (=ἐὰν)+接続法、δέ の方は分詞というのでは形が整わない、どちらか一方に

統一した方がすっきりする、と思うのは我々で、トゥキュディデスはこういう場合めったにそうしない)。三番目の命令文は PI である。

かくてこの長い文章は PII (16語)+nonP (26語)+PI (65語) という形になっているわけで、ここまで来ると、文が長いということはやはり難解さを生む最大の源とも思えて来る。特に全文が同種のペリオドスで構成されているならともかくも、これではどうもという気にもなろう。それならいっそのこと、この三つの命令文をそれぞれ独立させて三つの文にすればよい、という考慮も働く。しかしこの三つの命令文は要するに、「ニキアスの輩の言うことを聞いておとなしくしていようものなら、国を亡ぼすことになるぞ」というただ一つの煽動なのだから、やはり一つの方がよい、と私は思う[10]。

そこで、先刻はトゥキュディデスの文の長さは、彼の演説の難解さの原因にはなっていない、と断言したのだが、あれはあくまでも平均の長さをもとにしてのことで、問題は今見たような長文が演説には特に多いということにあるの

表 3

		文の数	長文		内50語以上	
		文	文	%	文	%
①	Ⅰ 68-71 コリントス人	46	8	**17.4**	2	4.3
②	73-8 アテナイ人	40	13	32.5	6	15.0
③	80-5 アルキダモス	43	10	23.3	3	7.0
④	Ⅱ 35-46 葬送演説	79	23	29.1	2	**2.5**
⑤	60-4 ペリクレス	39	10	25.6	6	15.4
⑥	Ⅴ 85-113 メロス談判アテナイ人	42	12	28.6	1	**2.4**
⑦	〃 同メロス人	26	8	30.8	0	**0**
⑧	Ⅵ 9-14 ニキアスⅠ	33	11	33.3	4	12.1
⑨	16-8 アルキビアデス	35	14	**40.7**	2	5.7
⑩	20-3 ニキアスⅡ	17	8	**47.1**	3	**17.6**
⑪	33-5 ヘルモクラテス	27	10	37.0	3	11.1
⑫	36- アテナゴラス	31	10	32.3	4	12.9
以上計		458	137	29.9	36	7.9
⑬	Ⅰ 1-23 序説	137	41	29.9	11	8.0
⑭	Ⅱ 47-54 疫病	57	13	**22.8**	2	**3.5**
⑮	Ⅳ 26-41 スパクテリア	104	34	32.7	11	10.6
⑯	102-8 アムピポリス	39	18	**46.2**	6	**15.4**
⑰	Ⅶ 75-87 アテナイ軍降伏	109	30	27.5	5	4.6
以上計		446	136	30.5	35	7.8

ではないかと疑われて、それなら先に挙げた箇所にどれぐらい長文が含まれているかを調べてみる。30語以上から成る文を一応長文と見なすが、ついでにそのうち50語以上から成っている文がどれぐらいあるかも見ておくことにする。その結果が「表3」である。

こうして見ると、長文を含む率から言っても演説と叙述部は全くと言ってよいほど等しくて、特に演説の中に長文が多い訳ではないことが分って、要するに、文が長いということは如何なる意味でもトゥキュディデスの演説の文の難解さにはつながらないということになった。個々の箇所について言うならば、演説では⑥⑩，つまりアルキビアデスのニキアスへの反論とニキアスの再反論が群を抜いて長文の率が高く、叙述の方では⑯のアムピポリスをめぐっての戦の記述がそうだ、というのが注目を惹き、逆に長文が少い方では、演説の部でペリクレスの戦死者葬送の演説というのは多少意外としても、メロス談判にそれが少いのはむしろ当然であり、叙述部ではやはり疫病流行の記述に長文が少いのもうなずけるように思える。これらのことについては後にまた触れる機会があるはずである。

4

では問題なのは長文の数ではなく長文の質かも知れないということになって、今度は叙述部の方から飛び切り長い文章を引いてみる。いくら長い文でも、僅か一つの文を引いただけですべてを尽くすことは望み得べくもないけれども、とにかく引いてみる。第一巻9.2、古代諸侯の中でなぜアガメムノンの率いるミュケナイ王国が特に強大になったのかを説明する一節である。119語から成る。

Λέγουσι δὲ καὶ οἱ τὰ σαφέστατα Πελοποννησίων μνήμῃ παρὰ τῶν πρότερον δεδεγμένοι Πέλοπά τε πρῶτον πλήθει χρημάτων, ἃ ἦλθεν ἐκ τῆς Ἀσίας ἔχων ἐς ἀνθρώπους ἀπόρους, δύναμιν περιποιησάμενον τὴν ἐπωνομίαν τῆς χώρας ἔπηλυν ὄντα ὅμως σχεῖν, καὶ ὕστερον τοῖς ἐκγόνοις ἔτι μείζω ξυνενέχθηναι, Εὐρυσθέως μὲν ἐν τῇ Ἀττικῇ ὑπὸ Ἡρακλειδῶν ἀποθανόντος, Ἀτρέως δὲ μητρὸς ἀδελφοῦ ὄντος αὐτῷ καὶ ἐπιτρέψαντος Εὐρυσθέως, ὅτ' ἐστράτευε, Μυκήνας τε καὶ τὴν ἀρχὴν κατὰ τὸ οἰκεῖον Ἀτρεῖ (τυγχάνειν δὲ αὐτὸν φεύγοντα τὸ πατέρα διὰ

τὸν Χρυσίππου θάνατον), καὶ ὡς οὐκέτι ἀνεχώρησεν Εὐρυσθεύς, βουλομένων καὶ τῶν Μυκηναίων φόβῳ τῶν Ἡρακλειδῶν καὶ ἅμα δυνατὸν δοκοῦντα εἶναι καὶ τὸ πλῆθος τεθεραπευκότα τῶν Μυκηναίων τε καὶ ὅσων Εὐρυσθεὺς ἦρχε τὴν βασιλείαν Ἀτρέα παραλαβεῖν καὶ τῶν Περσειδῶν τοὺς Πελοπίδας μείζους καταστῆναι.

この文章を頭から順々に読んで、ということはトゥキュディデスが頭の中で考え、そして書いた通りの順序に読んで、特に速く読む必要はないが、途中で「おや」とつっかえたり、「はてね」ともう一遍前の方へ戻ったりしないでこの文章を読む人というのは、どれくらいいるものだろうか。例の如く diagram にしてみる。

Λέγουσι δὲ καὶ οἱ τὰ σαφέστατα Πελοποννησίων | δεδεγμένοι
μνήμῃ παρὰ τῶν πρότερον

(1)
Πέλοπά | τε πρῶτον | τὴν ἐπωνυμίαν τῆς χώρας | σχεῖν (1a)
πλήθει χρημάτων | δύναμιν ποιησάμενον | ἔπηλυν ὄντα ὅμως
ἃ ἦλθεν ἔχων | ἐς ἀνθρώπους ἀπόρους 5
ἐκ τῆς Ἀσίας
καὶ ὕστερον τοῖς ἐκγόνοις ἔτι μείζω ξυνενεχθῆναι, (1b)
Εὐρυσθέως μὲν ἐν τῇ Ἀττικῇ ὑπὸ Ἡρακλειδῶν ἀποθανόντος,
Ἀτρέως δὲ μητρὸς ἀδελφοῦ ὄντος αὐτῷ
καὶ ἐπιτρέψαντος Εὐρυσθέως | Μυκήνας τε καὶ τὴν ἀρχὴν κατὰ τὸ
ὅτ' ἐστράτευε *οἰκεῖον Ἀτρεῖ* 11
(τυγχάνειν δὲ αὐτον φεύγοντα τὸν πατέρα διὰ τὸν Χρυσίππου θάνατον)
καὶ ὡς οὐκέτι ἀνεχώρησεν Εὐρυσθεύς,
→ *βουλομένων καὶ τῶν Μυκηναίων φόβῳ τῶν Ἡρακλειδῶν*
ἅμα δυνατὸν δοκοῦντα εἶναι 15
καὶ τὸ πλῆθος τεθεραπευκότα

(2)
Τῶν Μυκηναίων τε καὶ ὅσων Εὐρυσθεὺς ἦρχε τὴν βασιλείαν Ἀτρέα

(2a)
παραλαβεῖν
καὶ τῶν Περσειδῶν τοὺς [Πελοπίδας] μείζους καταστῆναι.
(3)　(3a)

こうして見ると全体の構造は至って単純である。文頭の1行に主語述語が出揃っていて（Λέγουσι δὲ…οἱ…δεδεγμένοι）、あとはその述語動詞 Λέγουσι に3組の Acc.+Inf.（Acc. は四角い枠で囲んで番号 1. 2. 3 をつけ、Inf. には下線をつけてやはり番号 1a. 1b. 2a. 3a をつけておいた）がかかっている。それだけである。問題は、初めてこの文章を読む時は、「3個の Acc.+Inf. が連っているだけ、それだけである」などとは感じられない、ということにあるだろう。この文の場合、部分部分の意味は実によく分る。だがその部分部分がどうつながるのかは、一読しただけでは分りにくい。文頭の Λέγουσι に3組の Acc.+Inf. がつながっているとは言っても、最初の Acc.+Inf.（(1)-(1a)(1b)）の構造は混み入ってはいるが摑みやすい。所が2番目の Acc.+Inf.（(2)-(2a)）とこの Acc.+Inf. の間隔が開きすぎていることがまず読みにくさを惹起し、しかもその間隔はただの間隔ではなく、そこにいろいろのものが詰め込まれていることがその読みにくさを決定的にする。まず、8-9行目の μὲν…δὲ…でまとめられた2個の Genitive absolute は、少し読み進めば分るとは言え、8行目に何の connective もないので、前にかかるのか後にかかるのかは一見立所に了解という訳には行かない。そして次にまた Genitive absolute が来て（10行目）、その次に括弧にくるまれた説明文（これがまた Acc.+Inf. になっていて、この Inf. τυγχάνειν の尻はどこへ持って行けばよいのか気になるが、それが分らなくても文意は分るので構わないことにして読み進む。しかし、「それが分らなくても文意が簡単に分る」のは一にかかってこの括弧のおかげであり、つまり刊本の校訂者のおかげであり、この括弧がなかったら読者はもっと悩むはずである）が来て、その次は ὡς に導かれる副飼節（13行目）、と思う間もなくまた Genitive absolute（14行目）となる。そして、エウリュステウスがアッティカで殺されたとか、アトレウスがその彼の母方の甥に当っていたとか、エウリュステウスが出かける時その支配権をアトレウスに委ねて行ったとか、彼が出かけたきり帰って来なかったとか、それが全部挙げて、ミュケナイ人がアトレウスに王位に即いて貰おうと欲したことの理由になっていよう。そこで diagram の中の14行目への矢印がつくことになる。しかしそれにしてもミュケナイ人がこう急いでアトレウスを王にと考えたのは、ヘラクレイダイに襲われはしないかと恐れたからで、それが14行目末の φόβῳ τῶν

Ἡρακλειδῶν である。しかしミュケナイ人がそう心配しそう欲した他に、アトレウス自身も財力ありと信じられており、また民衆の受けもよかったなどということもあって、アトレウスは王位に即くことになったので、diagram の 15-6 行目のような図式になる。所がこの 15-6 行目はこのままで別の読み方が出来て、それを Classen-Steup の註が主張している。つまり 15-6 行目を 14 行目の *φόβῳ*･･･と同列において、これをもミュケナイ人が欲したことの理由ととるのである。ただしこの読み方は不自然だから私は採らないが、この程度の不自然さならトゥキュディデスでは普通だと思うから Classen-Steup はこう読んだのだろう。どう不自然かと言うと、――14 行目の *φόβῳ* はミュケナイ人が感ずる恐れだからこれで構わないが、15-6 行目の分詞 *δοκοῦντα* と *τεθεραπευκότα* が単数対格であるのは、これらが次行の *Ἀτρέα* に所属するものだからであって、それを *βουλομένων Μυκηναίων* にかけるの不自然である。そうするためには、正式には「…とミュケナイが思って」というような *Μυκηναίων* の方に所属する分詞が必要であり、それがないのに Classen-Steup が敢てこれを *Μυκηναίων* にかけて読んだのは、トゥキュディデスがここでも有名な「言葉の節約」をやっていると考えてであろうと思われる。この種の節約なら確かにトゥキュディデスは始終やるからである。従って Classen-Steup の読み方も立派な読み方の一つなのである。

しかしここをどう読むにせよ、主文 12 語＋第 1 [Acc.＋Inf.] 31 語＋第 2 [Acc.＋Inf.] 69 語＋第 3 [Acc.＋Inf.] 7 語、簡単に数字だけ並べれば、12-31-69-7 という部分から成った文章がここにある訳で、これはバランスが悪すぎるという感じがする。この文中に Acc.＋Inf. が 3 個あるということが露出して見えず、それは読者が見破らねばならないものになっている大きな理由もそこにあるだろう。先程アルキビアデスの演説の中で (diagram の 12 行目と 14 行目) 折角 *μὲν*･･･*δὲ*･･･を使いながら *μὲν*･･･と *δὲ*･･･がバランスを欠いている (つまり *μὲν*･･･の方を *ἐάν*＋接続法にしたのなら、*δὲ*･･･の方も *ἐάν*＋接続法にするのが普通だということ)、ということを指摘したが、そういう小さなアンバランスから、ここでのように大がかりなアンバランスまで、トゥキュディデスの文章はアンバランスが多く、しかもこれは故意にそう書いたと思えるふしがある。

ここまで来ると、先のアルキビアデスの演説とこの叙述に共通した特徴（長い文だという他に）が見えている。すなわち、文の一節一節の意味はそれほど分らなくはないのだが、その一節一節が互にどうつながっているのかが摑みに

くい、というのが一つ。そしてその摑みにくさを助長しているのが文の各部のアンバランスだ、というのが一つ。つまりこれらの文を diagram に組んでみるのに思いの外の手数がかかるのだと言い換えてもよい。世の中にはすらすら読める文章とそうは読めない文章というのが確かにある。文章を読む時、我々は無意識の裡に必ず言葉の運びを予測しながら読んでいるからで、その予測にぴったり沿うた文章はすらすら読めるが、書かれている言葉が我々の予測とは違った展開を示すならば、その都度ひっかかることになるだろう。

しかし困った。私としては、この二つの文にこういう共通点が見えるのは本当は困るのであって、演説の文章を叙述の文章と比べると、ほらこんなに違うとこそ言いたかったのである。そこでここでちょっと目先を変える。

5

項目ばかり並べるようで我ながら気になるが，この前不定法を調べたのだから，分詞についても調べておかないと片手落ちだと思えるので、ここでそれをやっておく。

分詞の用法で典型的なものとして誰しも思いつくのは、いわゆる状況を示す分詞 (circumstantial participle) や絶対的属格 (genitive absolute) であろう。現に分詞はこうした用法で用いられることが多いのだが、これは英文法で言う分詞構文である。分詞構文だからこれは、文のある節ともう一つの節を（自分の属する方の節の重みを軽くしつつ）つなげる役割を果しているに過ぎず、ある節に対してその外側で関係するのみで、その内部にまで絡み込んでは来ない。だからこれを読み誤ることは少く、つまり読みやすくて、語学の初歩を習い始めた頃、こういう分詞を見つけるとほっとしたことを思い出す人も多いはずである。以下ではこれを分詞第二類と称し Ptp II と記すことにする。曲者なのは、属性的にせよ述語的にせよ、形容詞的に名詞にかかる分詞で（いわゆる attributive participle と supplementary participle)、この種の分詞は英語などの近代語に比べると適用範囲がずっと広い分だけ厄介なことがある。中には Clause の代用をするものもある。例えばラテン語の ab urbe condita とよく似た ἅμα ἦρι ἀρχομένῳ（「訪れる春と共に」→「春の訪れと共に」トゥキュディデス II 2.1）あたりから、初学者は何か違和感を感ずるに違いない。この種の分詞を分詞第一類と称して Ptp I と記すことにする。念を押すと、Ptp II は常にやさしい、Ptp I は極めて透明な場合とそうでない場合と両

方ある。

そこで例の如く表を作ってみる（「表4」）。そしてこれも例の如く、表中太文字で記してあるのは多寡いずれかで顕著な数である。

表 4

	文の数	分詞の数	1文平均	Ptp I		Ptp II		Gen. Abs.	
				語	%	語	%	語	%
① I 68-71 コリントス人	46	64	1.4	33	51.6	31	48.3	4	6.2
② 73-8 アテナイ人	40	81	2.0	25	**30.8**	56	**69.2**	11	**13.6**
③ 80-5 アルキダモス	43	37	0.9	16	43.2	21	56.8	3	8.1
④ II 35-46 葬送演説	79	118	1.5	54	45.7	64	54.3	0	**0**
⑤ 60-4 ペリクレス	39	66	1.7	36	54.6	30	45.4	4	6.0
⑥ V 85-113 メロス談判アテナイ人	42	73	1.7	35	47.9	38	52.1	4	5.5
⑦ 〃 同メロス人	26	45	1.7	33	**73.4**	12	**26.6**	0	**0**
⑧ VI 9-14 ニキアス I	33	47	1.4	18	38.3	29	61.7	5	10.6
⑨ 16-8 アルキビアデス	35	50	1.4	23	46.0	27	54.0	1	2.0
⑩ 20-3 ニキアス II	17	25	1.5	14	56.0	11	44.0	0	**0**
⑪ 33-4 ヘルモクラテス	27	51	1.9	19	37.3	27	62.7	5	9.8
⑫ 36-40 アテナゴラス	31	53	1.7	25	47.2	28	52.8	0	**0**
以上計	458	710	1.5	331	**46.5**	342	**53.5**	37	**5.2**
⑬ I 1-23 序説	137	226	1.6	77	34.1	115	65.9	34	15.0
⑭ II 47-54 疫病	57	78	1.4	33	**42.3**	36	**57.7**	9	11.5
⑮ IV 26-40 スパクテリア	104	217	2.1	72	33.2	112	66.8	33	15.2
⑯ 102-8 アムピポリス	39	87	2.2	23	**26.5**	47	**73.5**	17	**19.5**
⑰ VII 75-87 アテナイ軍降伏	109	161	1.5	51	31.7	101	68.3	9	**5.6**
以上計	446	769	1.7	256	**33.3**	411	**66.7**	102	**13.3**

この表から分ることは次のことである。

1. ただ分詞の数だけを言うのならば、演説よりも叙述部分の方がやや多めである。

2. ただし Ptp I、Ptp II を分けてみると（演説でも I よりは II の方が多いのだが）、演説では I と II にそれほど大きな差はないが、叙述部分の方では II は I の丁度2倍もの数に上っている。

3. 以上の2点から、一つの大ざっぱな傾向として Ptp I は叙述よりは演説の方により多く、Ptp II は叙述の方に多い、ということは言える。

4.　ついでながら、Ptp II の中から絶対的属格（Gen. Abs.）だけ取出してみると、ここでもまた演説と叙述の間ではっきりした差が認められる。特に、ここに取上げた12の演説のうち④⑦⑩⑫では Gen. Abs. が全く使われていない、というのが目を惹いて、ひょっとしたらトゥキュディデスは，演説の中ではできるだけこれを使うまいと努力さえしたのではないかとさえ怪しまれる。しかしそれを言うには、他の散文作家や弁論家の分詞を広く調べなければならず、今の私にはその時間は欠けている。ただひとりデモステネスの『王冠』についてだけは部分的に調べたことがあるので、それをここに紹介しておくと、この作品の最初の100節（という全体のおよそ3分の1に当る）では、使用されている分詞の総数351、Ptp I 176、Ptp II 175 でほぼ同数、後者のうち Gen. Abs. は39で分詞総数の11.1%に当る。この結果、演説の方に Ptp I が多いのも、演説の中では Gen. Abs. が極端に少いのも、トゥキュディデス独自の個人的傾向で、別に演説というものが全体としてそういうものだという訳ではない、ということになりそうである。

個々の箇所について見るならば、演説の方ではスパルタでのアテナイ人の演説とメロス談判でのメロス人の弁論が極端な対照をなしていること、また叙述の方では、疫病の描写とアムピポリスの攻防の記録が対照的で目を惹く。

6

ここでこれまで調べた所を、さらに簡単にまとめると「表5」のようになる。初めの2段は演説と叙述を全般的に、それ以下は個々の箇所を対比したもので、○印は明確に多いことを示し、×印は明確に少いことを示している。また何の印もついていないのは、数の上で特に際立った特徴がないことを示す。念のため、多いと言い少いと言ってもこれは絶対数のことではなく、比率が高い低いということである。例えば演説の⑩ニキアス II で、30語以上の長文の欄は○だが、その実数は8で、この欄の最小で×印のついている①のコリントス人の演説のそれと同じである。しかし⑩の方は文の総数17で、そのうちの8だから○印になるが、①の方は文の総数が46でそのうちの8だから×印になる。

こうして見ると、今まで気づかずにいたことも見えて来て面白いが、演説全般と叙述全般については，要するに今まで見て来ことの繰返しであって、これだけの事実から何かが言えそうかどうかは、個々の箇所について何が言えそう

表 5

	平均語数	長文 30語以上	長文 50語以上	ペリオドス PI	ペリオドス PII	ペリオドス non P	分詞 I	分詞 II	分詞 Gen. Abs.
演説全般				○		×	○	×	×
叙述全般				×		○	×	○	○
① I 68-71 コリントス人	×	×		○	×		○	×	
② 73-8 アテナイ人					○		×	○	○
③ 80-5 アルキダモス	×	×		×	○	○			
④ II 35-46 葬送演説	○		×	×	○				×
⑤ 60-4 ペリクレス				○	×		○	×	
⑥ V 85-113 メロス談判アテナイ人			×	○	×				
⑦ 〃 同メロス人			×	×			○	×	×
⑧ VI 9-14 ニキアス I				×	○		×	○	
⑨ 16-8 アルキビアデス				○		×			
⑩ 20-3 ニキアス II	○	○	○		×	○	○	×	×
⑪ 33-4 ヘルモクラテス		○					×	○	
⑫ 36-40 アテナゴラス			○						×
⑬ I 1-23 序説				×	○				
⑭ II 47-54 疫病	×	×	×	×	×	○	○	×	
⑰ IV 26-41 スパクテリア				○					
⑯ 102-8 アムピポリス	○	○	○		○	×	×	○	○
⑮ VII 75-81 アテナイ軍降伏									×

かを見てからにした方がよい。

そこで個々の箇所だが、特に目立つのは演説⑩と叙述⑭⑯である。全9項のうち1項を除いて他のすべてに○か×がついている。つまりこれらの箇所は個性的なのである。ここでは⑩を後廻しにして⑭の疫病の描写と⑯のアムピポリスの顚末をまず見ることにする。

この二つ箇所は内容から言って対照的なので、何かありそうに思えてはいたのだが、それがこのように二つながら目立つというだけでなく、殆どすべての項目について、一方が○ならば他方は×だというように対照的だという結果を見ると、さてこそと合点が行く。⑭に長文が少くペリオドスも少いのは当然と思える。ここはただひたすらに疫病の症状を記述し、それが止めどもなく蔓延したアテナイの町や人間がどうなって行ったかを刻明に報告する所だからで、長い文やペリオドスはふさわしくないと思えるからである。⑯の方は、戦略的

に重要なアムピポリスを、何とか敵将ブラシダスの急襲から救おうとして、附近の守備の任に当っていたトゥキュディデスが最善を尽くしたが結局間に合わず、これは作戦指揮の不手際だと断じられて20年の追放に処せられた，その顚末であって，悔恨と痛憤を以て書いたから、つまり書いたトゥキュディデスの心が難渋を極めていたから、ここの文は難渋なのだ、と言う人がいる。

しかし⑭はべつに短い文で書いてある訳ではなく⑯も長文ばかりで埋まっている訳ではない。例えば⑭の、全般としては短かめな文で綴った描写の中で、長い文を用いてあるのは何を語るためだったのかは気になる。47.2から疫病の話が始まり、そこから48の終までは言わば総論、49は症状の説明、50-1は患の周囲への影響、52-3は国と社会への影響を述べているが、ここで一番長い文は49.6にある。今それを含む前後6個の文を紹介する。日本語が許す限り原文に忠実にしてみると、

「①そして看取り手のいない患者たちの多くは，不断の渇きを押さえるために貯水池の中へ実際に飛込みさえした（原文ここまで14語）。②そして多く飲もうが少し飲もうが結果は同じだった（11語）。③じっと寝ていられないというどうしようもなさと不眠とが，四六時中病人を苦しめつづけた（12語）。④そして体は，病勢が盛な間は衰弱せず，予想に反して苦痛に耐えつづけ，そのため大抵の患者は，まだ多少の体力を残しながら7-9日で死ぬか，そこで死を免れると病が腸へと下って行ってそこにひどい潰瘍を起し，水のような下痢が襲って来てそのために衰弱して，日数を経てから死んだ（60語）。⑤実はこの病は初め頭に根づいて症状を起し，上の方から始まって体の至る所に廻ってしまっていて，仮に患者が最悪を免れたとしても，体の末端部にその後も症状が現れた（28語）。⑥すなわち恥部や手足の先まで病は襲い，多くの者がこれらを奪われ，眼さえ奪われた者もある（22語）。」(10)

さて、④が前後の文に対してかなり長いのだが、このことに不自然を感じた人がいるだろうか。内容だけから言えば、六つの文すべて要するに病状の説明であって、このように文の長さが変る必然性はない。つまり全体として短い文章の多い中に突然長い文が来ても、それは特別な内容に促されてのことではない、ということである。文の長さの変化は、むしろリズムだとでも言う他ないであろう。

⑯にしても、なるほどトゥキュディデスはこの文章を書きながら切歯扼腕の思いだったかも知れないが、それがそのまま文章に出ているとすれば、彼は文章家ではない。それに PII の比率が高いというのも、この文章が切歯扼腕だ

けで書かれたものではないことの証拠になる。しかし一層面白いのは⑩のニキアスの演説である。これは、アテナイ人にシシリー遠征を思い止らせようと彼が諄々と理を説いたのに対して、アルキビアデスが甚だ調子の良い煽動演説をぶち、大勢がその方に傾いてしまったのを見たニキアスが、半ば諦めながらも、法外な軍備（が本当に必要でもあった）を要求すれば、驚いた市民たちが考え直してはくれまいかと、「……を……する必要がある、それから……をする必要がある……」と並べ立てる所で、トゥキュディデスはこれを109語の文章にした。δοκεῖ μοι･･･χρῆναι、たったこれだけが文の主部で、あとはこれに続々と Acc.+Inf. をつけている。そしてその一つ一つに例の如く副詞句や節がかかっているのだが、続々と並べられるので無論ペリオドスにはならない。むしろその逆で、一向に終が見えず、どこまで並べるのかと、聞いている者ははらはらしたに違いない。これは nonP の長文がその効果を最大に発揮している例である。しかし、各種軍備のあれも必要だこれも必要だと並べ立てるだけならば他の言い方――例えば短い asyndetic な文を並べる――もあるだろう。所がトゥキュディデスがこういう文を書いたということは従って、彼が言い方を選択したということである。

こうして見ると、個々の文の長短とかペリオドスにするかしないかを決めるのは、「何を」ではなく「如何に」述べるべきかという考慮だ、ということがはっきりする。これは多分当り前と言ってもよいことである。これに対して、誰某の演説とか何々の章とかいうようなまとまった箇所についてなら、「表5」が示すように、「何を」述べている所だから然々だ、とある程度まで言えるのである。

7

最後にもう一つ、実は古代以来学者たちによって次々に指摘されて来たトゥキュディデスの言葉遣いの特異点というのがあって、今ではすでにかなりの数に上っている。それをかなり豊富に、しかも簡潔に教えてくれるのは、K.J. Dover 氏が学生のために書いた註釈書 *Thucydides: Book VI* (Oxford 1965) の 'Introduction, pp. xiii–xviii（同時に *Book VII* も刊行され、この 'Introduction も多少の変更を加えてそのまま組込まれている）で、中でも19番まで番号をつけた箇条書きは役に立ち、我々の当面の問題に直接かかわりがある点で有益なのはその7番以下である。その中には私が上で触れた点も幾つか

含まれている。例えば μὲν…δὲ…の構文で、μέν の要素と δέ の要素が異っていてバランスを欠いているとか（9-10 頁参照）、「……と思って」という、普通ならあるべき分詞がないとか（14 頁参照）「言葉の節約」[11] とか。Dover 氏が挙げている特異点の中で、私が未だ実例を挙げておらず、しかも非常に頻繁に出て来るという点で大事なものと言ったら、「指示詞が何を指しているのか分りにくいことがある」というのが恐らく筆頭だろう。例は幾らでもあるが、例えば⑩のニキアスの演説の中で、23.1 の末尾の所で彼が τῶν μὲν κρατεῖν, τὰ δὲ καὶ διασῶσαι と言う時、τῶν は敵軍で τά は味方の軍を指しているということは、考えれば分る。しかし考えないでも分る、つまりすらすら読める、という訳には行かない。

しかし Dover 氏が説明しているのはあくまでも第六巻と第七巻についてだけなので、本稿の初めに紹介した Norden や Blass の本、さらには Classen-

表 6

			文の数	特異点 数	特異点 頻度
①	Ⅰ 68-71	コリントス人	46	9	1/5
②	73-8	アテナイ人	40	14	1/3
③	80-5	アルキダモス	43	8	1/5
④	Ⅱ 35-46	葬送演説	79	19	1/4
⑤	60-4	ペリクレス	39	7	1/6
⑥	Ⅴ 85-113	メロス談判アテナイ人	42	8	1/5
⑦	〃	同メロス人	26	8	1/3
⑧	Ⅵ 9-13	ニキアス Ⅰ	33	8	1/4
⑨	16-8	アルキビアデス	35	8	1/4
⑩	20-3	ニキアス Ⅱ	17	2	1/8
⑪	33-5	ヘルモクラテス	27	11	1/2
⑫	36-40	アテナゴラス	31	10	1/3
以上計			458	112	1/4
⑬	Ⅰ 1-23	序説	137	11	1/12
⑭	Ⅱ 47-54	疫病	57	8	1/7
⑮	Ⅳ 26-41	スパクテリアア	104	8	1/13
⑯	102-8	ムビボリス	39	2	1/19
⑰	Ⅶ 75-87	アテナイ軍降伏	109	5	1/22
以上計			446	34	1/13

Steup の註釈書の 'Einleitung' (S. LXXII ff.) などを見ると、主として語彙、語順に関する特異性がまだまだあることを知らされる。尤もその中には、Substantiv にかかる属格がその Substantiv の前に置かれるというような、特異性には違いないが読んでいれば分るので構わない、というようなものもかなり含まれているが、中にはそうも行かないものもあって、一例を挙げれば第一巻の序説、その 2.6 に、*καὶ παραδεῖγμα τόδε τοῦ λόγου οὐκ ἐλάχιστόν ἐστι*･･･という文があるが、この文の主語は *τόδε* だということは、ちょっと立止まらないと分らない。つまりここでは主語が、*παράδειγμα τοῦ λόγου οὐκ ἐλάχιστον*「今述べたことの大きな生きた証拠」という句の中に割込んでいるのである。このように主語が、あるいは動詞が、あるいはその他の何かが、syntax 上一つの単位に属していて切離せない関係にある語群の中に割って入るというのは、トゥキュディデスがよく書く語順で、これなどは良い語法

表 7

			特異点内訳			同
			指示詞	アンバランス	その他	計
①	Ⅰ 68-71	コリントス人	4	0	5	9
②	73-8	アテナイ人	7	2	5	14
③	80-5	アルキダモス	3	1	4	8
④	Ⅱ 35-46	葬送演説	9	5	5	19
⑤	60-4	ペリクレス	4	3	0	7
⑥	Ⅴ 85-113	メロス談判アテナイ人	2	0	6	8
⑦	〃	同メロス人	2	0	6	8
⑧	Ⅵ 9-14	ニキアス Ⅰ	5	1	2	8
⑨	16-8	アルキビアデス	3	1	4	8
⑩	20-3	ニキアス Ⅱ	1	1	0	2
⑪	33-5	ヘルモクラテス	1	2	8	11
⑫	36-40	アテナゴラス	3	2	5	10
以上計			44	18	50	112
⑬	Ⅰ 1-23	序説	5	1	5	11
⑭	Ⅱ 47-54	疫病	2	0	6	8
⑮	Ⅳ 26-41	スパクテリア	3	3	2	8
⑯	102-8	アムピポリス	2	0	0	2
⑰	Ⅶ 75-87	アテナイ軍降伏	2	1	2	5
以上計			14	5	15	34

とも悪い語法とも言いにくく、どういう意図でこうするのかなどはさらに分りにくく、ただ癖と言う他ない。

このような特異点を、上来扱って来た箇所について調べてみた結果が「表6」だが、これは驚くべき数字を示している。すなわち、演説の方にはこのような特異点が112個見出されるのに対して、叙述の方にはそれが34個しかない、言い換えれば、演説は全部で458文だから概略4文に1回の割で現れるのに、叙述（466文）の方では13文に1回しか現れないということで、「表6」ではそれを頻度という言葉で表した。なお「表7」はこれら特異点の内訳で、最も代表的と思われる2点――「指示詞が何を指しているのか俄には分らない」というのと「何らかの種類のアンバランスがある」というのを挙げ、あとは「その他」とした。なお、前者は特異点全体の約40%もあり、後者は約16%である。

しかし何より大事なのは、演説には叙述部の約3倍の特異点があるということである。

8

今までのことを簡単にまとめておくとこうなろうか――。演説の方が叙述部よりむずかしいということについて、

(1)　トゥキュディデスの文の長さは、ギリシア語散文の中では長い方だが、それは演説に限ったことではない。

(2)　演説にはペリオドスが多いが、これは文を読みやすくこそすれ、決してむずかしくはさせない。

(3)　分詞の用法のうち、Ptp I が演説の方に多いということは、演説を多少読みにくくする可能性はある。

(4)　トゥキュディデス独特の語法が、断然演説に多い。

さてこの中で、(1) と (2) は演説の文をむずかしくさせるということには全く無関係で、だから考慮の外に置いてしまってよいかと言うと、そうは行くまいとここで思い至る。少くとも (1) は、単独では、特に演説をむずかしくする要因たり得ないが、トゥキュディデスの文をむずかしくしている要因の一つではあり、こういう下地があって、さらにそこに何かが加わると、これはただ加わるだけではなくて相乗効果を発揮するに違いないからである。

Dover 氏が折角1番から19番まで列挙した特異点のうち、1-6番を省いた

のは、このうち1番と2番は語形のことで我々には無関係であり、3-6番は語彙のことなのだが、3以外はやはり無関係だと考えたからである。その3番というのは実は -sis 名詞のことで、これは関係はあるが本誌前号でこれを扱ったので省いた。そこで見られたことを略記すると、-sis 名詞の、特に 'periphrastic' -sis と私が名づけた用法は、トゥキュディデスは他の散文作家に比べて断然多い、ただし、演説と叙述部において際立った差異は認められない、というものであった。これは今先の (1) と同じで、単独では演説難解の要因とはなっていないが、他と連合するとやはり要因となって生きて来る。従ってこれを (5) として追加する。ということになれば、これも前号で報告した不定法、特にこれを不定法として使った例が、演説では散文作家中最多であり叙述部では他の作家と比べても少い、ということは、当然演説の文体を叙述部とは違うものにする。そこでこれは (6) となる。こうして六つの要素が並んだが、このうちで演説を難解にすることに関係がなさそうなのは、恐らく (2) のペリオドスだけである。

所で文の息が長いこととか、抽象名詞 (-sis 名詞が特に多いが) を主語にする文が多いとか、それに加えて前置詞を prefix とする合成動詞——しかもその多くはトゥキュディデスによる新造語——を多用しているということとかは、一般に、特にドイツの学者たちによって、トゥキュディデスが自分が書く対象にふさわしい雄大、荘重、悲壮 (würdevoll, erhaben) な文章を編み出すべく試みた手法だと言われている。これについて私は、それ自身誤った解釈だとは思わないが、別の捉え方も出来ると思っている。

トゥキュディデスがどの程度ヘロドトスを意識していたかは分らないが、意識していたことは間違いないことで、彼はヘロドトスの文章を主として人を楽しませるお話だと考えていたに違いない。彼自身、名指しこそしていないが明かにヘロドトスを目してそう言っている (I 22.2-4. とくに 4)。それに対して自分が書くのは、決して人を楽しませるのではなく、ペロポンネソス戦争というこの人類が経験した最大の不幸な事件が、どうして起りどう経過したかということで、将来、というのは人間というものがこうしたものである以上また同じような事件が起るだろうから、将来の読者がこの書物を得る所があると思ってくれるように、と念じて書くのだ、とも同じ所で言っている。

この結果最も重んじられるのが正確さということで、そこで生れて来るのが一切の感情を排除した彼の文章であると同時に、出来事と出来事の関係を明確に伝えるために、彼が互に関連のある出来事だと考えることは、関係文や副詞

節、さらに分詞や Acc.+Inf. 等、あらゆる手段を尽くして一つの文で書いたのではないか。短い文を連ねると、個々のことは明確に書けても、文と文とのつながりは、とはすなわち出来事と出来事の関係は、読む方でそれをつなげて読まない限りは断ち切れてしまうし、それに何よりいけないのは、饒舌な感じを与えることである。だからどうしても文は長くなる。だから、同じく長い文を書くと言っても、イソクラテスの文が長いのとトゥキュディデスの文が長いのとでは訳が違うのである(12)。時としては、トゥキュディデスという人は実によく物の見える人だったから、彼自身処理に困るほど多くのいろいろなことが一つながりの中に見えたに違いないが、それでも彼は、一つながりのことならば一つの文に結ぼうと努力する。しかしそのためには文の各部の整理（ということは考えの整理でもある訳だが）が必要だということになり、まず、簡潔に出来るものはすべて簡潔にする、言葉に多少の無理強いはしても簡潔にする。「……と思って」だの「……と言って」だのいう分詞は、なくても分りそうな（と彼が思った）所では省いてしまう。「彼らが他国から〔侵略された〕という場合のことであって……彼ら自身が近隣諸国を侵略する場合のことではない」と〔　〕で括られた動詞を省いてしまう (VI 79.1)。「スパルタが彼らを援助するのを我々が妨げたおかげで諸君はアイギナを支配しサモスを懲らしめることが出来たのだ」と言う代りに、「我々故にスパルタが彼らを助けなかったことが、諸君にアイギナ征服とサモス懲罰とを許した」と書く (I 41.2)(13)。名詞を排して代名詞で済む所は全部代名詞にする。普通なら中性定冠詞＋形容詞（例えば τὸ ἀπρεπές「ふさわしからざること」「不名誉（なこと）」）だけだが、彼はこれにさらに「我々の」とか「彼らの」とかいう形容詞を併用する等々、あらゆる種類の表現の簡素化と切詰めをやる。

もしこうだったとするならば、トゥキュディデスに長文が多いのも固い表現が多いのも、意余りて言足らずめいた感じがする文が多いのも、みな根は一つである。そして演説が特にトゥキュディデス流の特異な言い廻しに満ちているのは、演説であるが故に彼なりのやり方で凝った、ということにすぎないだろう。つまり、確かに PI という種類のペリオドスが多いというような、トゥキュディデス自身よりはむしろ弁論術の伝統に沿うたと見るべき面もあるが、一般に、叙述の文にない要素が演説の文の中にある、というようには考えられないと言える。そしてアンバランスということについて言うならば、これは余りすらすらと読んでほしくないが故に工夫ではないか。演説の方にもっとペリオドスがあってもよいと思えるのにこの程度で納っている、というのもそのせ

いではないか。それにしてもどうかと思われるほどのアンバランスが時々あるのは、やはりどうかと思うほど表現を切詰めたのに出遭うのと同じで、これはトゥキュディデスの癖だったのでのだろう。

繰り返し言うが、もしトゥキュディデスの文の難解さが、本当に意余って言足らずということであるならば、特に演説だけに彼の言い廻しの特異点が集中するはずはない——むしろそれが叙述の方に集中してもおかしくないとさえ思える。また不定法の用い方が演説と叙述でああまで違うはずもない。しかし何より第一に、胸の中の痛恨というようなものに彼の筆が支配されていたと考えるのは、彼を文筆家と認めないことである。彼の文はもっと意識的であり、あれだけの大著を通じて文体に変化も弛みもないというのは見事である。そして、あれだけ物を見る眼を具え、自分が見たことを文にすることが出来たというのは大したものであると同時に、これが散文というものなのだと我々に教えている。

註

(1) F. Blass, *Die attische Beredsamkeit*[3] (Leipzig 1887 repr. Hildesheim 1979) I, S. 203ff. E. Norden, *Die antike Kunstprosa*[2] (Leipzig 1909; repr. Stuttgart 1971) I, S. 95. どちらも名著だが、表題が示す通り Blass のはギリシアの、しかもアッティカのものだけを全4巻で扱い、Norden のはギリシア・ローマ全体を扱い、なおその上に中世・ルネサンスまで眼を配って全2巻という違いがある。トゥキュディデスに関しても無論 Blass の方が遙かに詳しい。しかし Norden は見なくてもよいとは言えない。なおトゥキュディデスの文体だけを扱った大きな業績として J. G. A. Ros, *Die μεταβολή (Variatio) als Stilprinzip des Thukydides*, Nijmegen 1938 (repr. Amsterdam 1968) がある。

(2) しかし私は最近のこの風潮に反発を感じている。こういうことを主張する人々の念頭には分りやすさということしかないらしいからである。同様に英米で発行されている一般向きの文法書や英語教育書の多くに見られる教え—複文を書く時は出来るだけ主節を先に、従属節を後に—というのにも反発を感じる。

(3) こうした不定法構文はヘロドトスに夥しく見出される。次から次へと動詞が不定法になっていて、これが延々と続く。続くので、この文もまだ「私が聞いた所では」とか「別の人たちの言う所によれば」の内容なのだなと気がつく。こうなると，不定法しかないからこれは独立した文章ではない、と見る方が却って不自然である。

(4) この作品は R. C. Jebb, *The Attic Orators*[2] (1893) 以来偽作と疑われている作品である。それを敢てここに持出したのは、「葬送演説」と言えばいわゆる 'epideictic' ということになるが、リュシアスの名を冠した作品でも 'epideictic' ともなるとこうまで文が長くなる、同じ弁論でも法廷弁論とは違って、一般に 'epideictic' というのは文が長い傾向がある、と言えそうに思ったからである。

(5) デモステネスのこの演説にはかなりの長文もあるのだが、平均するとこうな

る。その理由は、例えば *ηὗρον.* とか *τεκμήριον δέ.* とかいう文もまた多いからである。

(6) アリストテレス『弁論術』3.9.3 以下。クィンティリアタス『弁論術教程』9.4.125。試みに、弁論術に関するすべての文献を網羅したと思える H. Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik* (München 1960), S. 458ff. を参照。

(7) 刊本として今日入手可能なのは Demetrii Phalerei qui dicitur de elocutione libellus, ed. L. Radermacher, Leipzig 1901 (repr. Stuttgart 1967) と R. Roberts, *Demetrius on Style*, Cambridge 1902 (repr. Hildesheim 1969) の2種である。

(8) 上註に挙げたデメトリオス (17節) によると、単一の colon の文とは例えばヘロドトスの『歴史』の劈頭の文だという——*'Ηροδότου 'Αλικαρνασσέος ἱστορίης ἀπόδειξις ἥδε.* これでは 'sensus suspensio' にはなっていないとも見えるが、「意味」は、「*ἥδε* は…*'Ηρόδοτος* の *ἱστορίη* の *ἀπόδειξις* である」、つまり *'Ηροδότου* という属格は subjective genitive で、「*ἥδε* は *'Ηρόδοτος* が *ἱστορεύω* したことを *ἀποδείκνυμι* するものである」となるから、それなら 'sensus suspensio' と言ってもよいかと落着ける。所がアリストテレス自身は、ヘロドトスの正にこの文章を、ペリオドスならざる文章の例として引いている(『弁論術』3.9.9) のでまた分らなくなる。

(9) Dover *ad loc.* は、同じ第六巻の 86.2 を参照しつつ、この両方の箇所では意味上の主語が A-B-A と交替しているのだと指摘しているが、それ以上の見解は述べていない。

(10) この箇所を近代語に訳したものが果して幾つの文を費しているか、今私の手許にあるものだけとりあえず見たら、次の通りだった。Hobbes の古典的な英訳は 4 (18世紀だけにコロンの活用が目立つ)。Loeb Classical Library の Smith の英訳は 5 (比較的直訳調に近い英語である割には——あるいはひょっとしたらそのために却って——文を細かく区切っている)。Rex Warner の Penguin 版の英訳は 4 (これは Penguin Books の他の訳同様誠に自由な訳で、原文の区切りなどには捉われていない)。Romilly の Budé 版の仏訳は 3 (これも対訳にしては自由な訳だが、セミコロンを活用して3文で納めた)。岩波文庫版の久保訳は 6 と多いが、日本語にセミコロンというものがない点は差引かねばならず、そうするとほぼ Rex Warner 並みか、という所。私はどうするかと言えば、出来るだけ原文の punctuation、少くとも一つの文は訳文でも一つの文にするように努める。この点については、福田恆存「翻譯論」(『私の演劇教室』新潮社 昭36所収) に対する極めて重要な批判である木下順二「シェイクスピアと日本語」(『随想シェイクスピア』筑摩書房 昭44所収) が大変参考になる。

(11) Dover 氏は 'Economy of expression' という項目には動詞の省略だけを含めて、分詞の省略などは別項にしているが、私はどちらも同じ項目に分類してよいと思う。

(12) イソクラテスの文が長いのは、無論彼の好みにもよるだろうが、註 (4) で言ったように、彼の演説というのが 'epideictic' だったせいもあると思う。

(13) このような言い方は英語では普通で別に「特異」視するには及ばない、と言われそうで、そう言えばなるほど「この道は汝を駅へ導くであろう」とか「彼の

勇敢さが全員から賞讃を稼いだ」とか続々と思い出される――「昨日の雨が小生をして外出することから妨げた。」しかしギリシア語では、たとえ書き言葉でも、この言い方は英語ほどには普通ではない。